

## 研究発表もうしこみフォーム

氏名：ハスゴワ（ハス高娃）

氏名のローマ字表記：Haigaowa

所属：神戸大学国際文化学研究所博士後期課程 D2

専門分野：文化関連専攻

発表のタイトル：聖母聖心会の宣教師がオルドス・ダラト旗の土地を教会の土地にすることができた要因

発表要旨（600字～800字程度）：

本発表では、聖母聖心会の宣教師たちがオルドス・ダラト旗のバガノールと銀匠窯子などの土地を教会の土地にして行くまでの経緯を検討したい。

ダラト旗と帰化城トゥメトゥ旗が黄河を挟んで接している地域では、清朝初期の頃から黄河の川筋が変わることによって土地争いが起こっていた。乾隆帝は乾隆 51（1786）年に初めて黄河の旧川筋を両旗の境界にする命令を下した。しかし、実際に土地紛争を解決する時には、どの川筋が旧川筋だと決められたのか記録がなかった。光緒年間、ダラト旗と帰化城トゥメトゥ旗との間で再び黄河の川筋が変わったことによって、土地争いが起こった。帰化城トゥメトゥの方は綏遠城將軍、帰化城副都統と山西巡撫の支持によって「六部の土地」を得ることができた。ダラト旗に与えられた「四部の土地」は、ダラト旗の人たちに「東における川の土地」と呼ばれていた。両旗の土地問題を解決した後、前任旗長の未亡人である夫人サランロールマとジャヒラグチ・タイジ・ブレントゥグスとの間で、その「四部の土地」を巡る争いが起こった。ジャヒラグチ・タイジ・ブレントゥグスは小作料目的で宣教師に土地を貸すことにした。宣教師と一緒にやって来た漢人農民たちは、自らをキリスト教徒であると主張していた。その教徒たちの人数はあっという間に数十人から 300 人以上になり、土地を取り戻すことが不可能になった。

結局、バガノールと呼ばれる土地が聖母聖心会の宣教師たちによって耕されることになった。一方、「四部の土地」のうちの銀匠窯子という所は、元々農地になっていて、後に宣教師によって誰か旗の官員から「購入」されることになった。以上のようなできごとの経緯を追求することによって、宣教師たちがダラト旗に入ってくることができた原因を明らかにしたい。